

Title	本物中の本物
Sub Title	
Author	加藤, 修(Katō, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.11 (2010. 11) ,p.201- 201
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	倉澤康一郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20101128-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本物中の本物

研究者が、自己の方法論に基づいて、真摯に学問を開し、業績を世に問い、批判に対しては誠実に対応し、機会があれば教育にも情熱をかけて従事している場合、それは本物である。

倉澤康一郎教授は、本物中の本物の研究者である。その志は高く、洗練された法学方法論を駆使し、学問の幅は広く、多数の業績を公表し、批判や論争にも賢く、建設的に対応し、優秀な後継者も育ており、教育能力も万全だからである。

倉澤康一郎教授の学問上の論理展開は、緻密で、矛盾がなく、隙もない。その展開があまりに精緻であるため、表面的な理解しか出来ない人は、同教授のことを「概念法学者」と評価する場合もある。しかし、それはまったくの誤解である。「概念法学」においては、現行制定法体系には欠陥がなく論理的自己完結性があることを前提として、形式的論理展開が見事なまでになされる。従っ

て、「概念法学」において、最上位概念が、何かの拍子に、時代迎合や権力迎合の雰囲気の中で、恣意的に決められ、客観性を具備するかのようには振舞い始めると、誤った自立的自己完結的論理展開ゆえにとんでもない人間性無視、人権侵害の結末となる。人類は、歴史上、何んどもこのような悲劇を経験してきた。

倉澤康一郎教授の法学方法論においては、最上位概念は、立法者の意思に従って設定され、時代迎合や権力迎合の可能性は排除される。立法者の意思、つまり、民の声により指導されるので、出発点において、「概念法学」とは、月とスッポンほど違うのである。ただ、ここで注意しなければいけないのは、民の声も思い違いをすることがあるので、それに気づいた人は、直ちにそれを指摘し、立法論を展開しなければならぬ。倉澤康一郎教授は、それが出来る研究者である。

運命の神様は、ひょっとして意地悪で、天邪鬼かもしれない。なにせ、選別して、本物中の本物から鬼籍へ招き入れるからである。

(平成二二年八月三一日稿)

名誉教授 加藤 修